

序 文

高度な専門性に裏付けられた大学での教育研究を進めていくためには、それぞれの分野固有の専門技術が不可欠となります。とりわけ、科学で得られた成果を社会に還元することを主たる使命とする工学では、新たな研究成果を生み出す上でも、また、それを社会に役立つ科学技術として完成させる上でも、専門技術が果たす役割には極めて大きいものがあります。工学研究科・工学部技術部は、専門技術を開発し活用するための専門家集団として、長年にわたって工学分野における教育研究に多大な貢献をしてきました。そして、自らも技術力や技能を高めるための研鑽を積んできました。このような活動が維持できたのも、ひとえに教員の皆様方および事務部の皆様方の暖かいゆるぎないご支援とご協力があったからであります。

法人化を機に、名古屋大学にも社会の一員としての責任と役割が強く求められるようになってきました。これに伴い、技術職員にも従来の教育研究支援に加え、防災・安全への対策、情報通信基盤の整備など全学的な共通業務への対応が望まれるようになってきました。この要請に応えるため、名古屋大学では全学の技術支援組織を全学技術センターに一元化し、工学研究科・工学部技術部もこれに統合されることとなりました。そして、この新体制のもとに、新たな技術開発とその活用が展開されてきました。その一方で、早急に検討すべき課題も明らかになってきました。その一つに、本技術部がこれまで培ってきた技術の継承に係る課題があります。これからの数年の間に多くの技術職員が定年を迎えるなか、これらの職員がもつ優れた技術を工学研究科はもちろんのこと、全学共通の貴重な資産としていかに継承していくかは、極めて重要な課題であります。

「技報」は、この1年間の工学研究科・工学部技術部における活動を技術報告として記したものです。そこには、本技術部に所属する職員が、日頃の教育研究支援を通じて培った技術と、研修等を通じて新たに獲得した技術が取りまとめられています。このため、本冊子は単なる報告書ではなく、工学研究科をはじめ全学が継承していくべき技術の資産目録でもあります。工学研究科・工学部技術部では、今後とも、全職員がそれぞれ得意とする技術にさらに磨きをかけるとともに、新たな技術の獲得にも積極的に努めていく所存であります。皆様方には本技術部の活動に忌憚のないご意見をいただくとともに、これからもその活動に対してのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 20 年 2 月

工学研究科技術部長
小野木 克明